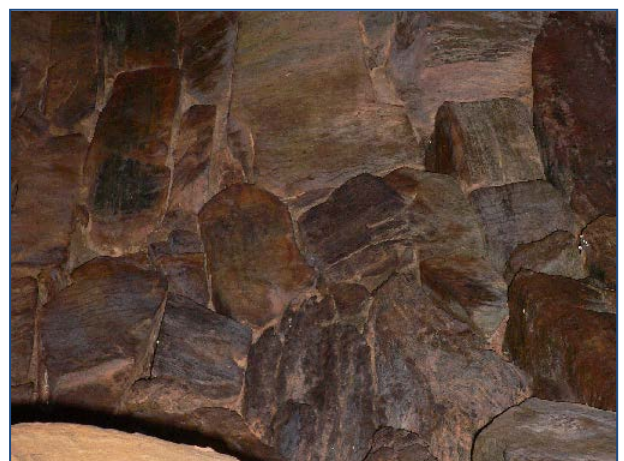


## 母の故郷から見た鉄の跡



浦田古墳及びその内部：福岡県八女郡立花町

福岡県八女郡立花町谷川、ここが私の母が生まれた里です。この九州・八女・谷川の地理を、グライダーに乗って上から見るかのように鳥瞰しますと、まず、九州中央部の有明海に面する処に大きな筑後平野が有り、その中央部を筑後川が堂々と流れています。この筑後川の南側を矢部川が流れており、その川は大分側の九州山地に源を発しています。立花町谷川はこの矢部川の支流になる辺春川沿いに有る、九州山地の山なりと平野とが境を接する地点にある村落です。ちなみに、別の言い方をすれば、邪馬台国はどこかという話しになるとその候補の一つに揚げられる場所に久留米市及び八女市周辺がありますが、立花町はその東隣の九州山地側に位置する町です。

この谷川に私の母は愛着を持っていて、私が子供の頃に母が故郷について語る時は、卒業した小学校唱歌の一節である『東臥牛のほとりにはあくたやの跡を訪ぬべく、西城山の麓には梅松の候偲ぶべし、、、』をよく歌って、次のような話をしてくれました。それは、『近くにある谷川寺と云う寺は、昔は僧坊が何十とあった由緒あるお寺で、今もその寺にある仁王様は行基が作ったとの言い伝えが残っている』とか、『N家(母の生家)は名字を名のる事を許された家であって、家紋には剣がなぜか入っている。その事で小学校の先生が何故に剣が入っているのか調べてみたらと言われた事があった』とかの話です。

この谷川から東南の九州山地側に一つ行ったすぐ隣の集落に、多々良と云う所があり、そこにも親戚が住んでいます。私の子供の頃の夏休みの楽しみはと言えば、父母の故郷に泊まりに行く事でしたが、祖母や従兄妹達の住んでいる立花町に行けば、祖母の家を拠点に今日はどこ明日はそこと母の姉妹宅を次々に、母と姉兄一緒に訪ね歩くのが嬉しかった記憶があります。その一つがその多々良です。“多々良”は辺春川の水際にあって、近所の子供達が水遊びをするのに格好の深みがあり飛び込みもできるので、夏休みになると大勢の子供達でにぎわっていました。その川で皆に交じって泳ぐのが楽しみで、その出来事は、今も記憶に残る、忘れがたい思い出の一つです。

さて、少し大きくなって高校に入る頃になってからか、何故に母の故郷の地名に“多々良”と云う名前が有るのだろうと、漠然と、極めて漠然ですが、興味を持ちました。つまり、“たたら”とは、踏鞴とも書く、昔、鉄を作るに際し鉄を溶す炉であった、あの“たたら”です。又、山口の大内氏の祖先が、昔、多羅(つまり教科書に云う任那があったあの加羅伽耶)から来た事から、その名字を多々良氏と名乗ったと言われますが、その子孫が移り住んだ事からきたであろう“多々良”でもありえる訳ですが、どうしてその土地を“たたら”を呼ぶのだろうという素朴な疑問です。

で、その“多々良”の由来について母に尋ねても何もとりわけ聞いていないとの事でしたし、踏鞴の炉跡のような物も、言い伝えも何も知らないとの事なので、疑問のまま、今日まで来ましたが、先日、実に久方ぶりに谷川そして多々良を訪ねた際に、その地名である“多々良”に関して少し判った事がありました。それがこの報告です。

言うまでもなく、八女は歴史のある所です。久留米市を中心に筑後平野を一望に見渡せる高良山近郊は、3世紀に邪馬台国がかって在った所とする説も多く、その山側にある八女の語源を谷川健一氏は『白鳥伝説』の中で、邪馬台国から見て山側を意味する“山”から来ていると述べています。又、八女市の丘陵部にある岩戸山古墳は、筑紫国造であった磐井の墓ですが、

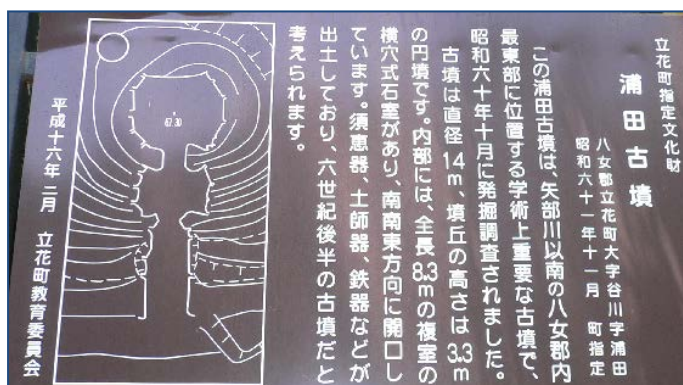
その 6 世紀の筑紫君磐井について、森浩一氏は『古代史の窓』及び『語っておきたい古代史』の中で、継体大王(男大迹王)に対抗しえた、徴税権・外交権・軍事権を持った九州北部にまたがる地域国家の王であったとしています。

八女に白木と言う地名がありますが、この白木は新羅から転化したと云われるように、渡来人が来て拓いた古里と推定できます。このように、八女地方は人物が集まり栄えた痕跡はどこそこに見いだせる土地柄ですが、その事は、別の言い方をすれば、縄文の時代、いやもっと前の太古の昔から、幾世紀にわたって都度九州にやって来た人々は、気候が温暖で水の便に不自由なく土地の肥えたこの八女を選び住んだと言えなくもありません。その各々の人々が幾時代にもわたって選び住み、そこでよりよい生活を営もうと努力し少しずつ歴史を切り拓いた結果が邪馬台国のような“国”を、そして“磐井”を八女に生んだのです。

さて、多々良から北に山一つ越えた所に小さな谷が在り、その谷には猫の額ほどの田畑が拓けた平地があって、そこには磐井より半世紀程後の 6 世紀後半に作られたと言われる浦田古墳が有ります。今の時代でも、1000 年後までも残るようなお墓を作る人はそうざらには居ないように、その当時にその古墳を残した人は、それが小さな古墳とは云え、それなりにりっぱな有力者で財力をもった人に違いなく、為政者に繋がった人だったと想像されます。

では、何故にどうして、お墓をそんな入り込んだ小さな谷に何を好んで作ったのだろうと云う事になりますが、それは、例えば、矢部川を一望に見渡せる丘陵の一番よい処に磐井が墓を作ったように、或いは、仁徳天皇が大古墳を海に面した百舌に作ったのは瀬戸内海から船で畿内にやって来た人々にその権力を認識させる為だったと言われるように、それにはそれなりのちゃんとした理由があって、わざわざそこを選んで作ったはずなのです。

今回、この多々良に住む親戚の E さん宅に泊めていただく世話になって、話を囲む中、次のような話を聞く事が出来ました。それは、『多々良には、辺春川に流れ込む小川の処に眼鏡橋がかかっているが、そのあたりは大雨が降ると砂鉄がおもしろいようにたくさん採れた、今はそれほどでもないが、今も採れる。』『その小川は遠久谷側の山の方から流れて来ており、その遠久谷には、金糞谷と呼ばれている地名がある』と言う話とか、『遠久谷の M 家(従姉妹が嫁いだ先になります)は平家落人の流れだ』とか、『E 家の昔の人の墓には、“堤”という字が墓碑銘の頭に書いてあり、この“堤”の姓を持った人は、辺春川上流の“辺春”地区に多い』とかの興味深い話です。(尚、山戸郡瀬高町大字山門字堤という所には古墳があり、堤古墳群と呼ばれています。そこに祭られているのが、堤大国玉神と云う神様です。この『堤』が、上述の“堤”と云う字が墓名の頭にあるという事と何か関連があるのかも知れません。



そこを訪ねて調べればその関連の有無についてもっと興味ある事が判るかもしれませんが、ここではこの事を書くに留めます。)

その翌朝、従兄弟に肝心のその古墳に連れて行ってもらう事になりました。それは浦田古墳

と呼ばれ、古墳は大小の石を巧みに積み上げ、隣合わせの石をきれいに埋めて隙間を無くしてある横穴式の古墳です。従兄の話に依れば、今は判別出来ませんが、子供の頃には確かに絵か文字のようなものが壁にはっきり描かれていたと言いますので、この地区によく見られる装飾古墳の一つです。が、私には、その古墳の近くに人の背より倍ほど高い高さで岩の地肌が見える小山が2つ程見受けられた事により興味をひかれました。谷の周りは、少しばかりの平地の田畑の他は木々に覆われた谷なのですが、その平地の中の“こぶ”の岩肌が切り崩されており、それが気になると言えば気になる光景だったのです。



砂鉄を含む花崗岩

さて、その岩のかけらを拾って多々良に戻ってきて、改めて周りを見回すと、同じ地肌の山崖が多々良にも有るのです。つまり九州山地の山裾と里の接点に位置する多々良の山側は花崗岩から成る山裾で、この多々良の地はまさに花崗岩の里だったのです。そして、その花崗岩の脈は、その谷につながっていたのでした。言うまでもなく、花崗岩の中には磁鉄鉱が含有されておりその磁鉄鉱は砂鉄の原料となります。有明海に面した佐賀県側の背振山地一帯が、花崗岩からの砂鉄による鉄を作った所としてよく知られていますが、同じ有明海に面した福岡県側の八女地方にもその花崗岩があった事になります。

とすれば、古代の人はこの砂鉄を集めて炭と一緒に加熱して砂鉄を溶かし鉄を作ったのですが、同じ文化を持った人がこの八女にもやってきて鉄を作り、栄えたという事は充分有り得る事と想像出来ます。やはり、この“多々良”には鉄にまつわる要件としての砂鉄が身近にある事で、そうした場所であった事から“多々良”という地名が付いた事をうかがわせるに足る匂いものがありました。

では、立花町多々良が花崗岩の砂鉄が身近にあって鉄の原料を採るのに便利だったとしても、なぜ、踏鞴を“多々良”に置いたのだろう、そして鉄を作ったのだろう、“多々良”の地には何か特別な理由があったのだろうかと言う疑問が、次にわきます。

と言うのは、立花町多々良の地で、仮に6世紀頃に鉄を作り出したとして見た場合、その頃の人口は今ほど多くはなく、ある本に奈良時代の8世紀の人口は凡そ600万人とありますので、それから今の八女市人口である4万人から単純に類推して見ますと、4万x(600万/1億2千)として、2千人程が岩戸山古墳の丘陵を中心とする八女に大きな集落と周辺の中小の集落を点々と作って生活を営んでいた事になりますし、魏志倭人伝には邪馬台国は7万余戸とありますので、八女が当時の政治経済の中心地だったとすればもっと多かつたとしても、多々良は中心部ではありませんから、大方は原生林と草々に覆われた手付かずの山野であったはずで、どんなに多くても2~3百人程の集落が川に臨んであった程度と思われます。そして、道路は大分方面に抜ける人一人が通る程の小さな道が多々良の土地を貫いていた程度ですから、鉄を作るには、矢部川・辺春川の流れを利用して、人々が集まる八女までに舟で砂鉄を運んで作った方が、権力者側にとって、いや権力者だけでなくとも作業をする人達にとっても便利だったはずで、

が、踏鞴が町の中心部に作られなかったのは、云うまでもなく、そう、鉄を作るには大量の

炭が必要だったからでした。

それを裏付けるのは次の記述です。出雲は昔からの和鉄で有名な処ですが、その和鉄に関する昔の本の記載の中に、次のような文章があります。

『高殿<sup>たたら</sup>の1回の作業に、砂鉄が3500-4000貫要るとすると炭も同程度が必要で、これだけ使って、得られる鋤<sup>けら</sup>が550-750貫で、銑が250-600貫副製される』とあるのです。(この鋤を、次に加熱して、鍛えて鋤やら鎌を作った訳です。) 貫と云う単位は、あまりピンときませんので、この炭を4000貫として15kgの炭俵に換算すると、実に960俵の炭が要った事になります。このように、大量の炭が一回の鉄を作るにあたって必要となると、踏鞴は、町の中心に作るより、山に近い処の方が便利で、、、と言うより必要不可欠だった訳です。

山と平地の境に位置する多々良は砂鉄だけでなく炭を得るに便利な所で、しかも水利の便をも備えた格好の場所だったのですから、踏鞴を作るにあたってはまさに格好の場所であった事になります。こうして見ると、多々良には、踏鞴がかってあったという個所は発見されていませんが、踏鞴があったしても不思議ではない状況証拠は、砂鉄に抱かれた古墳の存在が近くにある事などを含めると十分に有りえる事になります。しかも、多々良には大分側に少し入った谷に“金糞谷<sup>かなくそだに</sup>”と呼ばれる谷が在るのです。この“金糞<sup>かなくそ</sup>”は鉄を作った際の残り滓<sup>かす</sup>の事をそう呼んだ訳ですから、近くの谷にそうした呼称の言い伝えがある事は踏鞴が在った事を伝えているのかも知れません。

では、日本に於いて、鉄はどのくらいの昔から人が作り道具として使い出したのでしょうか。又、どうやって鉄を作る事を知ったのでしょうか。そして、どのように作ったのでしょうか。

弥生時代に稲作と鉄と弥生式土器が始まったと学校で習ったとか、又、世界史の時間で、西アジアのヒッタイトが世界で始めて鉄を作り出した、それは紀元前1800-1700年頃の話した云々、と言うような鉄に関しての学習を今もきちんと覚えているかどうかはともかく、人間が鉄を知り、そして鉄を作りだした事は人間の歴史を大きく変えました。しかし、一口に人間が鉄を手に入れたといっても、そこには、長い道のりと実にさまざまな軌跡があったはずで

鉄の溶ける温度は、銑鉄で1100-1200度、可鍛鉄で1300-1500度の高い温度が必要と言われています。私たちが身近に見る煙草の温度が700度ですが、人間が鉄鉱石や砂鉄を溶かして鉄を得るには、鞴<sup>かまど</sup>の助けを借りたりして高い温度を作り出す事が必要でした。従って、鞴がまだ発明されていない時代には、北風の強い風が吹く季節を待つて鉄を作り、風を起こす自然現象を司る神に祈りました。そして、人間は風を待つ事から、次に鞴を発明し、そして踏鞴を創意工夫してと、文明の時計の針を一つ一つ前に進めました。

先に見たヒッタイトを代表とする西アジアや中国の紀元前1千年以上前の事は別として、日本に於いて弥生時代になって鉄を知り、そして、鎌や鋤を作って開墾する事で初めて稲作が可能になったとすると、その弥生時代の鉄はどのように作られたのか、或いは、その当時先進地であった朝鮮/中国からどのようにもたらされたかは興味ある事柄です。

そうした興味に一つの答えを示唆してくれる著作に真弓常忠氏の『古代の鉄と神々』が有ります。それは、弥生時代の鉄は、褐鉄鉱や赤鉄鉱を利用して鉄を作ったというものです。この褐鉄鉱/赤鉄鉱なら700-800度の熱で鍛造する事が出来るので、昔の人が“野だたら”を作り、

北風を利用し鉄を溶かして、様々の鉄製品を作る事が出来たと云うのです。殊に、褐鉄鉱は“すず”と総称された水辺にある<sup>あし</sup>葦や<sup>こも</sup>薦や<sup>かや</sup>茅と言った禾本科植物の根に自然に褐鉄鉱が“鈴なり”に出来たのです。その生成のメカニズムは、周りに鉄分を含む土がある場合(一般には鉄分を含むので赤く見え、赤土と呼ばれます)、その鉄が雨等で流れ出て湖沼や湿原や川辺の底に溜まると、鉄バクテリアの働きによって水酸化鉄になり、それがこの“すず”植物の根に固定されて褐鉄鉱になったと云う訳です。

こうした事を知っていた古代の人はこれを利用して鉄を作ったという事を、真弓氏は祝詞や儀礼の祭祀に残されている伝承と象徴を読み解く事で、その時代の鉄作りの軌跡を見いだしたのです。

大阪府泉南郡岬町と云う所があります。この町は大阪湾に面し、大阪でも南端に位置しますので隣は和歌山県になりますが、ここに多奈川・谷川・深日・淡輪等の地名が有り、古くは『たな』と呼ばれた地域です。

ここはこの地方での呼び名で“壺石”<sup>つぼいし</sup>と呼ばれる褐鉄鉱の石がよく出た事で知られています。その実物は今も地元の<sup>ほうじゅじ</sup>宝樹寺に陳列してあり、大きい物は1メートル以上の直径の円盤形の物から小さい物は土の鈴より小さい物までさまざまですが、それらは確かに鉄の成分を有する褐鉄鉱で、これらは“鍛冶屋谷”<sup>かじやだに</sup>と呼ばれる所から主に出土したものとされています。この“壺石”はここだけに留まらず、日本各地で見つかっており、その呼び名は“鳴石”<sup>なるいし</sup>とか“鈴石”<sup>すずいし</sup>とか地方によってその呼ばれ方は異なりますが、それらはいずれも褐鉄鉱です。これらの“すず”の生成過程はいずれも上記の鉄分を含む<sup>あかつち</sup>赭土が地層として付近にあり、それが流れ込み滞留する澱みがあって、そこに葦等の植物が生えていれば、そこに生きる鉄バクテリアの働きで自ずと時を経て出来る事は既に見た通りですが、こうした“すず”を地方によって呼び名が異なっている事は鉄を作る“すず”が当時に於いてどこそで取り出されたかを示すものではないでしょうか。

この自然の摂理を古代の人は、神様の敬虔なもたらし物として<sup>あがめ</sup>崇める一方、この鉄を古代の人は極めて有用で貴重な物として大切にしましたのです。

以上を踏まえ弥生期の八女を見てみますと、八女・岡山で弥生時代後期の鍛冶関連遺跡が発掘されていますので、このレポートで見えてきた事があながち的外れで無いとすれば、邪馬台国があった3世紀には八女でも鉄が作られていた事を推定出来るかもしれません。

が、それはともかく、紀元500年代の浦田古墳の主がその鉄作りに関するキーマンの一人とすると、弥生時代が紀元前300-400年前頃から紀元200-300年頃ですから、多々良で鉄作りが



今も赤水が流れ出す鍛冶屋谷の小川(上流)



溶解した黒色塊が確認できた崖ヶ所



宝樹寺の壺石&携帯電話[高12cm]

スタートした時代は、弥生時代より少なくとも 500 年以上も後の時代という事になりますので、その時代の鉄作りは踏鞴を備えた、弥生時代の風にまかせた少量の鉄作りとは質の異なる、専門集団に依る踏鞴を備えての本格的な鉄作りだったに違いありません。



褐色の壺石(左：外、右：内)

興味深い事に、こうした 5-6 世紀の鉄作りは、八女の多々良だけに見られる現象では無く、日本の全国規模で共通に見られる事柄です。そして、それは、江上波夫氏が唱えた騎馬民族説と重なって、日本各地で馬具や鎧等の金属製品がその時代の遺跡から発掘される事と結びつきますし、6 世紀にお隣の南部朝鮮で在った新羅による金官加耶の併合(532 年)及び加耶諸国の併合(562 年)が直接間接にこの“鉄作り”に影響を与えている事は間違いない事と思われます。つまり、その併合が加耶の人達の日本列島への渡来を起し、それが日本各地での、踏鞴を伴った新たな鉄作りに繋がったと思われるのです。

さて、この泉南郡岬町にある多奈川や谷川との呼ばれる地名の語源は、先程も書いたように“たな”の語源から来ていると言われていますが、それは、“桁”（『けた』と辞書にはありますが『たな』と読みます）から来ており、この“桁”は“鍛名”から、つまり“鍛名”から来ていると谷川氏は指摘しています。

とすれば、仮に、立花町谷川の谷川が、この“鍛名”から来ているとすれば、僧坊が何十とあったと伝えられる谷川寺が、何故そのように発展したか、その寺が繁栄した財力基盤は何処にあったのか、、、と云う疑問についての解決の糸口になるかも知れません。

その谷川寺は奈良時代に行基が開いたとされており、それは AD720 年頃の 8 世紀の事とされていますので、その古墳の主の子孫がその後も鉄作りを核として地道な歩みを続けたとすれば、八女地方は製鉄を軸とした鋤鋤等の生産手段の拡がり背景に 200 年に亘って着実にその営みを遂げて、その繁栄の結果の一つが、谷川寺が創建され栄えたバックボーンと繋がったと解釈すれば、谷川寺の言い伝えも有り得ない事では無いように思われます。

私の報告は、今回、ここでお終ります。谷川・多々良に住んで来た私達の祖先と、磐井や浦田古墳の主はどう繋がると考えたらよいのでしょうか。いろいろ興味がつきません。

後記：

実に久方ぶりに母の故郷を訪ねました。その滞在は出張の週末を利用したもので一泊の短いものですが、実に久しぶりの九州訪問で、親戚には大変お世話になりました。そして更に、この谷川訪問の 1 週間後に会社の製品クレームが発生し、鹿児島 M 家を訪ねるチャンスが生まれました。M 家は多々良から更に九州山地に入った遠久谷で蜜柑作りをしていたのですが、より良い蜜柑作りの為に鹿児島に居を替えた親戚で、この機会にいろいろな話を聞く事が出来ました。下の本は、M 家の或る方が、平家の落人との言い伝えのある家伝等を調べ記録したものです。それは、私達今の人々の在り様は自分達の営みだけに依るのではなく、先祖の軌跡の繋がりと結びついている事を、改めて認識させられた本でした。(本には、何故、遠久谷に於いて

みかんが早い段階で始められたのかについても具体的に書いてあります。)

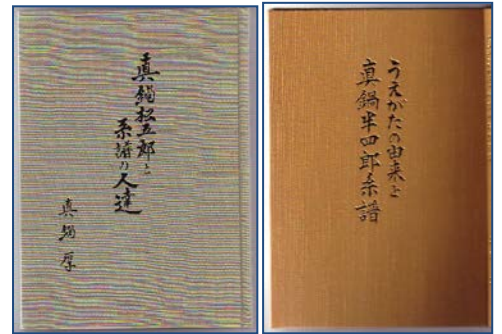
さて、“<sup>かなくそだに</sup>金糞谷”の事は聞いても詳しい事はわかりませんでした。が、私にとって、以下の興味深い話がありましたので、ここに記録しておきたいと思います。それは、遠久谷の山上に10戸以上の集落が昔はあったと云う話です。

一般には山の上は水の便等から考えれば生活物資の補給の意味で不便ですから、峠の茶屋程度か炭焼き小屋はあっても、それ以上は何か理由がないと生活の場は設けないのが普通です。何か理由があったはずですが、,,,,,,,,,

それからその親戚の姓についてです。家名Mは“まなべ”を“真部”と書く例が有るように“まなべ”は“まな部”となります。古代において『ニギハヤヒ』と一緒に<sup>あまのいわくすぶね</sup>天磐樟舟に乗って天下って来た<sup>もののかべ</sup>物部の一族に、『<sup>いなべ</sup>為奈部』の物部があります。(『<sup>いなべ</sup>猪名部』とも書きます。)この“<sup>いなべ</sup>為奈部”はこの天下りの時に舟の操縦・造船に従事したといわれる一族で、瀬戸内海のおおみしま大三島<sup>おおみしま</sup> 一带に本拠を置いたことで知られています。M家の先祖は真鍋島を本拠にしていた水軍であったと聞きましたが、その真鍋島が大三島からそんなに離れていないのは興味ある符合です。又、何より興味深いのは、この猪名部も古代に於いて鉄に関係した人々として知られているのです。

[記：2003年12月24日]

川添 洋



200	300	400	500	600	700	800	900	1000	1100
239		400	528	532	571	676	728		1185
卓弥呼が帯方郡に遣使		高良玉垂宮を祀る	磐井戦争	新羅 金官加耶を併合	宇佐八幡宮の創建 浦田古墳	新羅の統一	行基が谷川寺仁王像建立		壇の浦の戦い

